



新刊
紹介

『ジェロムスキ短篇集』

Opowiadania Stefana Żeromskiego

小原雅俊(監訳)

〈ポーランド文学古典叢書〉12

未知谷 2024.11



portrait of S. Żeromskii
by E. Niewiadomski 1900

「ピョートル博士」を翻訳して

私の翻訳作品が活字になるのは『ポケットのなかの東欧文学』（成文社 2006）以来2度目になります。ポーランド語読解能力はその時より向上したと思いますが、日本語表現能力はお粗末なまま、かなり小原雅俊先生に助けいただきました。最初、何を訳そうかとネットで読めるジェロムスキ作品にざっと目を通しました。その中で私の心にヒットしたのが「ピョートル博士」でした。

介護・家業と翻訳と

現在、私は千葉から山口に移住し、自分の親の介護と家業の手伝いをしています。親が高齢で、もう代替わりすべき時期だと思い、東京にいる跡継ぎの兄にいつ帰って来るのか打診するも「今は帰れない」の一点張り。父は「お兄ちゃんが帰って来るまで頑張る」「自分が死んだら帰って来るじゃろう」と兄の帰りを待ちわびています。「ピョートル博士」では主人公のドミニク・ツェジナ氏が息子ピョートルの帰還を待ちわびており、私はドミニクと父、ピョートルと兄を重ねてしまい、「これはうちの話だ、これにしよう」と決めました。

選んで訳し始めたものの、家業に加えて母の骨折や入院、父を連れての病院通いでまとまった時間を取れることは少なく、締切を過ぎてはまだ出来上がらず、小原先生やポーランド人の友人に助けられながら何とか校了にたどり着きました。

言い回しが難解でつい分かりやすく意識してし

まうのですが、文学作品の場合は難解なものは難解に訳さないといけませんし、そもそも私の頭の中の辞書には難解な日本語の語彙が無く、お恥ずかしい話、小原先生のアドバイスを頂いてもその語を辞書で引かないと意味が理解出来ないという事態も。世の中の翻訳に携わり数々の本を出されている方々の優秀さとご努力にただただ敬服する次第です。

この作品の中には没落シュラフタで苦勞して息子のために働いてきた父と、留学を経て高学歴の子の考え方の違いがポーランドの農村や鉱山の風景とともに描かれています。子は親の言う事を聞くもの、帰ってきて跡を継ぐもの、と信じる親世代が近代的な考えに染まった子世代から考え方を否定され継承を拒否され失意に沈む。これは私の実家に限らず世界中の普遍的な出来事のようにですが、消滅の危機が迫る過疎地域に住む者としては、人口減少と相まってとても複雑な心境です。

(前田理絵、会員)



『いまは、ここがぼくたちの家： ウクライナから戦争を逃れてきた子ども』

バルバラ・ガヴリルク(文) マチェイ・シマノヴィチ(絵)

田村和子(訳)

彩流社 2024.12

Teraz tu jest nasz dom.
Barbara Gawryluk,
Maciej Szymanowicz,
Literatura 2016



戦火に追われ、ウクライナからポーランドに逃れた子どもたちは、「せんそう」や国外避難、新しい土地での生活をどのように感じたのでしょうか。この絵本は、ウクライナ東部のドンバス地方から 2014 年にポーランドに避難し、難民となったバラノフスキー一家の実話をもとにした物語です。平和がどれほど尊いか、子どもたちの気持ちが痛いほど伝わってきます。

ウクライナから

ドンバス地方で建設会社に勤めるポーランド人の父親とウクライナ人の母親、長男で小学3年生の

ローマン、小学ゼロ年生(幼稚園年長組に当たる)の弟のミコワイ、妹のナタリア(3つ)は、近くに住む祖父母とともに楽しく平和な日常を送っていました。

いつも遊びに行く祖父母の台所は、ボルシチや

ピェロギ(餃子に似た食べ物)やロールキャベツのにおいがしました。おばあちゃんは夜になるとウクライナの昔話をしてくれ、おじいちゃんは、魚釣りやキノコとりに連れて行ってくれたそうです。しかし、ある日突然、ロシア軍がやって来ました。

巨大な戦車がすべるように進んで来て爆発音や警戒警報が鳴り響きます。一家は地下に隠れました。爆弾が学校の屋根を壊しました。父親は「そかい」を決意します。子どもたちのぬいぐるみや積み木、本などを小さなリュックに詰め込み、ウクライナ軍の兵士に護衛されながらバスで移動し、輸送機でポーランド側に脱出します。でも祖父母は残りました。高齢の人たちは居場所を変えたくないのです。

ポーランドへ

一家はポーランド北東部の難民センターで半年過ごした後、支援財団が世話をしてくれた南部の団地に落ち着きます。ローマンとミコワイは新しい学校に通い始めますが、思うように周囲になじめません。ローマンたちはポーランド語を話せるのですが、クラスの子どもたちに「やあ、野蛮人!」「あんたたちって難民なんですよ」と言われ、意地悪をされたりします。

ですがローマンは「君たちのことはちっともこわく

ない。こわいのは戦争と発砲と爆発だ」とポーランド語で言い返し、一緒にサッカーをするうちに自分らしさを取り戻します。戦争で故郷に戻れない中、なんとか自分の居場所を見つけたのです。絵本には柔らかい色合いのイラストと表情豊かなキャラクターたちが描かれ、全体を優しい雰囲気になっています。

この物語の歴史的背景を少し説明しましょう。ウクライナでは2014年2月に親ロシア派の大統領ヤヌコーヴィッチがマイダン革命によって追放されました。これを受けてロシアはクリミア半島を3月に併合。東部ドンバス地方で反政府分離運動を引き起こし、分離派を後押ししました。ロシアとの戦争はこのころから始まっており、2024年2月に全面侵攻したわけです。

筆者は昨年4月、ポーランドのクラクフでウクライナ難民の人たち取材したことがあります。難民の子どもたちの中にはポーランドの小学校になじめず不登校になったりする子がいました。ポーランドの人たちはウクライナ難民のために寄付を募り、語学教室を開き、住居や食料、衣服、靴を提供して全力で支えています。この絵本は寛容さ、偏見にとられないこと、人の気持ちに共感する大切さを教えてくれます。

(先川信一郎、ジャーナリスト、会員)

ロシアによるウクライナへの侵攻から3年が経過し、停戦に向けた主要国間の協議がはじまり、生命優先の名の下に大国の駆け引きも渦巻いています。

本書に登場するローマン少年一家がウクライナのドネツクからポーランドに避難したのはロシア軍がウクライナ領のクリミア半島に侵攻し、さらにウクライナ東部まで戦闘を起こした2014年。この時の紛争が2022年2月14日のロシア侵攻の発火点であるという訳者田村和子氏の解説を読んでではじめて、このロシア侵攻が青天の霹靂のように突然はじまったのではないことを、恥ずかしながら知るのでした。

どの史実もそこだけを抜き取って理解することが難しい領土問題ですが、本書では実に率直な子どものまなざしの視点からの描写によって、戦争をテーマにしながらも、大人の既成の正義概念を柔らかく解かず良書としての価値が際立ちます。ポーランドの子ども向けに書かれた本ですが、困難に立ち向かう大人への勇気の入門書ともなるでしょう。

ローマンの一家の日常として、刻一刻と戦火が迫ってくるあり得ない現実、そして疎開という国外脱出行、祖父母との別れ、ポーランド難民センターでの一時避難生活、さらにぼくたちの家での新生活への様々の戸惑いと、それでも新芽のめばえを

携えて成長していこうとする主人公ローマンの心のひだに、そっと寄り添う筆者の視線が、読む大人の目を浄化させます。

想像をいかに膨らませても、このロシア侵攻で犠牲になった膨大な数の人々の嘆きといたわしさには到底手の差し伸べようもない無力感に苛まれますが、受難の時代を乗り越えたポーランドの精神性を日本の私たちこそが背負う役割が問われているのです。あらゆる場面で無知による偏見で線引きされる差別が横行していますが、別け隔てない天日のような心根、振る舞いを、この日本でも未来の大人になるこども達に降り注げる日常の自分でありたいと読後に感じました。

そして世界の情勢と報道のあり方をもう少し学ばなければ…心が張り裂けるほどの痛みが時と共に緩慢になりつつある怖れに愕然とする契機にもなりました。

(熊谷敬子、運営委員)



エッセイの最後に、狷介な学者として糾弾するのではなく「ぼくは内心自分のことをヤコブソンの孫弟子だと、ちょっと誇らしく思うことにしている」と穏やかに締め括っている。その文章作法の優雅。沼野充義の書くものは奔放闊達でありながら万遍なくその気配りが潤澤に行届いていて温かい。それは半世紀変わらない沼野文学の揺るがないセオリーだ。

さてこのたびの増補版の三篇への手放しの賞賛はさておいて、一九八八年、九六年の刊行時にあれほどバズった本文本篇の魅惑的エッセイに触れよう。この『ロシア文学を学びにアメリカへ?』はこれまで私達が手に取って眼にしている数多の作家達の身辺留学記とは、その趣きを全く異(こと)にしている。まさに「言葉」をその中軸に据えて一步も日常身辺小説の安易に流されていない。ロシア語は無論のこと、欧米語、東欧語への果敢な挑戦は読み進めて小気味よく快い。

とりわけポーランド語への傾注は著しい。本篇二十八章の中の五分の一以上の章が「ポーランド!」に拘泥して費やされている。アメリカには五百万人以上(二〇二一年のある統計によれば八百八十一万人)のポーランド系の人口があって、彼らのもたらしたポーランド語の固有名詞の数々は確実にアメリカ英語の一部になっているのである(「アメリカの中のポーランド」から引用)ということなら、それは必然とも言えるのかもしれない。としても、沼野充義のポーランド愛、量り難いほどに深い。ワルシャワという名前の街がアメリカのインディアナ、イリノイ、ケンタッキー、ミズーリ、ニューヨーク、オハイオ、ヴァージニア各州にあることを知ったのも、沼野の著作によってだった。

さらに瞠目するのは「シカゴ!」だ。その中心部から北西に広がるミルウォーキー通りには巨大なポーランド人街があり、その人口、五十万とも七十五万とも言われ、その居住区域に足を踏み入れるとポーランド語ばかりが聞こえてくる——というトリビアも、私はこの本から得た。シカゴは首都ワルシャワに次ぐポーランド系人民人口とも知った。以降、マイケル・ジョーダンの活躍したシカゴ・ブルズ黄金期にも、映画『シカゴ』のアカデミー賞受賞時にも、私の脳裏に強く蘇ったのは、この「ワルシャワからシカゴへ」だった。淡々と描かれながら、強い衝迫を得た章だった。カフカ『アメリカ』のカール・ロスマン少年のストーリーそのまま、迫害を受けたポーランド人の求めた新天地が「シカゴ!」だったに相違ない。

新版の「がんばれイディッシュ語」は、このたびさらに補論が付加されて、胸踊る興味深さだった。「イディッシュ」への沼野の熱が今再び本文以上の濃厚、濃密さで伝わってくる。ドイツ語方言として取り扱われがちだが、イディッシュはまさにユダヤ語であり、東欧ユダヤ人の母語であると断じている。潔い断定に胸が熱くなる。特筆すべき章と思う。

類い稀なポリグロット沼野充義の、彼にしか書き得ない言葉のヴァイオリン旋律に、是非耳傾けて欲しいと熱望する。けだし名エッセイである。

蛇足ながら、今、私は沼野充義・恭子夫妻の編訳、現代ロシア小説傑作選『ヌマヌマ』(河出書房新社 2021.10)にもはまって抜けだせずにいる。これも加えて推したい。怖るべしヌマ! ヌマ!

(文中敬称略)

(長屋のり子、詩人、会員)



新刊
紹介

『いまは、ここがぼくたちの家：

ウクライナから戦争を逃れてきた子ども』

バルバラ・ガヴリルク(文) マチェイ・シマノヴィチ(絵)

田村和子(訳)

彩流社 2024.12



本書を読んで、私は自分の子ども時代を思い出しました。主人公のローマン君が、故郷のウクライナでの戦争の恐怖に加えて、避難先のポーランドで、レッテルを貼られて、どうせ言葉が分からないだろうとクラスメイトからいじられるのは、避難してきた子どもたちにとって絶望でしかないでしょう。気持ちが追い詰められてしまいます。

私は父の仕事の関係で全国を転々としました。具体的には、兵庫県、大阪府、愛知県、東京都、千葉県、そして北海道で暮らしています。また、社会人になってからは、マレーシアとシンガポールに14年間住みました。移動を繰り返したことで、その地域の文化や習慣を知り、考え方の違いに気付く

ことができたので、今は転校に感謝しています。しかし、苦労も多くて大変でした。

まず、レッテル張りに苦労しました。私は小学4年生のとき、1980年初頭に兵庫県の宝塚市から札幌市に転校してきたのですが、当時は漫オブームでした。そのため、転校した小学校のクラスでは

「関西人は漫才師のようなものだ」と思っている生徒が少なからずいました。だから「面白いことを言うヤツではないか?」と期待されたのですが、それが辛かったです。また、B&Bの島田洋七さんの「めっちゃめっちゃ陰気やでえ〜!」が爆発的に流行っていたため、私にもその口調と振りをするように強要する生徒がいました。今であれば「めっちゃめっちゃ陰気やでえ〜!」とご本人のように腰を振ってやれると思います。しかし、北海道に来たばかりで、友だちと別れた悲しみを引き摺っていた私は、この美味しいレッテルを上手く利用できませんでした。

次に、表現方法の違いに苦労しました。「捨てる」ことを関西では「ほかす」と言います。一方で、札幌では「投げる」と言うと思います。だから掃除の時間にクラスメイトからゴミ箱を渡されて「このゴミを投げて!」と言われたとき、私は驚きしばらく呆けていま

た。「何やってんの、早く投げてきてよ!」と促されたので、「ホンマに、ええの…?」と戸惑いながらゴミ箱を抱えて中のゴミを一気にぶちまけました。今度はクラスメイトたちが驚き呆けていました。漫才師のように面白くもなく、また指示が通らない私の立場が一層不利になったのは言うまでもありません。この出来事がきっかけとなって、私は「北海道の言葉が分からないとても困った人」として、何についてもやたら細かく説明されるようになりました。その状況を回復するため、私は関西弁を封印して「投げる」「こわい」「したっけ」などの北海道の特有な表現を過剰に使うことで道民化できていることをアピールするようにしました。

今後は日本も外国人を積極的に受け入れていくはずなので、私も共感力を鍛え、外国の子どもにも寄り添ってあげられるようになりたいものです。

(齊藤賢人、会員)



敦賀における人間性のレッスン

シルヴィア・オレーヤージュ & 佐藤レミリア



「人道の港」敦賀ミュージアムの静かな展示室で、3人のポーランド系日本人の子どもたちが黙って見入っています。彼らの目は色褪せたモノクロ写真に注がれています。その中には、まるで自分たちに似た、100年前のポーランド人の子どもたちが写っています。写真の子どもたちの表情には、苦しい体験の跡と、わずかな希望のきらめきが映し出されています。

それは「ポーランド・シベリアの孤児たち」——戦争と革命によるロシアの混乱の中で孤児となり、孤独と絶望に打ちひしがれていた子どもたちです。ウラジオストクでポーランド極東児童救済委員会を設立し中心となったアンナ・ピエルキェヴィチという勇敢なポーランド人女性は、ポーランドの孤児たちを決して忘れさせませんでした。彼女の必死の助けを求め、すべての子どもたちのための母の叫びは世界に響き渡りました。

そして、日本がそれに応えたのです! 日本赤十字社と敦賀の一般市民は、心と家を開きました。ただの避難所ではなく、人間性そのものを差し出したのです。子どもたちは温かいお風呂、清潔な服、栄養ある食事を受けました。日本の子どもたちは自然と、飢えたポーランドの仲間にもみずみずしく甘い赤いリンゴを持ち寄りました。しかし何よりも、見知らぬ異国の地で、異なる言語と完全に違う文化の中で、子どもたちは優しさと笑顔を受け取ったのです。体と心の傷を癒すほどの繊細な気遣いに包まれた孤児たちは、やがてポーランドへの長い帰路に就きました。

敦賀ミュージアムに立つポーランド系日本人の子どもたちは、深い教訓を受け取っています。それは「思いやりには国境も時代も政治も関係ない」ということ。「大きな苦しみの前では、一つの人間的な行動が数百人の運命を変え得る」ということ。ポーランドと日本の絆は、単なる政治や経済関係ではなく、深い共感の記憶に刻まれていることを、子どもたちは目の当たりにします。

ポーランド系日本人の子どもたちの目に浮かぶ涙は、当時の孤児への同情だけでなく、深い感謝の涙でもあります。どれほど暗い時代にも善意という光が灯せること、それは世代も大陸も越えて伝わる温もりになることを、子どもたちは学びます。敦賀の物語は、私たちが皆ひとつの人間家族であり、互いに無償で助け合うことこそが最も高貴な使命であり贈り物であると、時代を越えて思い起こさせてくれるのです。

(Sylwia Olejarz, 北海道医療大学 & Remiria Sato)

